令和８年度第１回運営指導委員会 概要　令和８年７月１０日（金）１５時３０分～１６時４０分

1. 開会・挨拶

運営指導委員会では、新たな委員構成のもと、多様な視点から SSH 事業の充実を図ることが確認された。

県教育委員会からは、SSH 指定 21 年目を迎える学校として、県内理数教育を牽引する役割への期待が示された。

学校からは、第 4 期 SSH の最終年度として全校体制での探究活動を推進していること、次期申請に向けてさらなる発展を目指していることが説明された。

2. 生徒研究発表会に対する主な講評

（1）研究内容について

先行研究を十分に調査し、自らの研究の位置付けを考えている点は評価できる。

一方で、

研究目的と結論の整合性

実験結果に対する考察

研究のオリジナリティや他手法との比較 が十分とは言えず、研究を深める余地があるとの意見が出された。

実験結果をそのまま示すだけでなく、なぜその結果になったのか実験方法に問題はなかったか、次にどのような検証が必要か を考察する姿勢の重要性が指摘された。

（2）英語発表について

英語で研究発表に挑戦したこと自体は高く評価された。しかし、多くの委員から次のような課題が指摘された。

課題

発表原稿の読み上げに終始していた。

留学生からの質問に十分対応できない場面が多かった。

発表者・質問者双方のやり取りが深まらなかった。

発表内容が聴衆に十分伝わっていなかった。

英語による発表が目的化し、本来の研究成果発表の意義が薄れていた。

提案

英語での発表経験を積む機会としては意義がある。

ただし、

英語力向上が目的なのか

研究内容を深めることが目的なのか を明確にする必要がある。

AI 翻訳等を補助的に活用しながら、質問内容の理解と応答の経験を重視する方法も考えられる。

発表者が失敗を恐れず挑戦できる環境づくりが重要である。

3. 今後の SSH 事業について

（1）次期 SSH 申請の方向性

学校から次期計画案として、以下の 3 つの柱が示された。

課題研究・探究活動の充実

授業における探究的・教科横断的学習の推進

大学・企業・専門機関との連携強化

また、

社会実装を意識した探究活動

起業家教育や社会課題解決型学習

留学生や海外との連携

校内科研費制度の導入

などが構想として紹介された。

（2）社会実装に関する議論

多くの委員から活発な意見が出された。

肯定的な意見

　社会とのつながりを意識することは重要である。

　企業や技術者との連携は生徒の視野を広げる効果が期待できる。

検討を求める意見

　探究力育成と社会実装は必ずしも同じ方向性ではない。

　基礎的な探究力形成を重視すべきではないか。

　社会的意義だけでなく学術的意義も大切である。

「社会実装」をどのように教育活動へ落とし込むのかを具体化する必要がある。

（3）育成したい生徒像について

委員からは、

「探究力」という言葉だけでは抽象的である。

学校ならではの特色ある人材像を明確に示した方がよい。

これまで 20 年以上の実践で得られた成果を基に、「高校段階で身に付けるべき探究力」とは何かを整理してほしい。生徒が研究を楽しみながら主体的に取り組める仕組みづくりが重要である。

との助言があった。

4. 主な助言・まとめ

生徒研究発表について

　英語発表への挑戦は評価する。

　研究そのものを深める指導とのバランスを考える必要がある。

　発表の目的を明確にし、聴衆との対話を重視した形式を検討してほしい。

次期 SSH 申請について

　社会実装の考え方をさらに整理すること。

　育成したい人材像をより明確に示すこと。

　大学・企業・専門家が果たす役割を具体的に位置付けること。

　これまでの成果を土台として発展的な計画を構築すること。

総括

委員からは、生徒の探究活動や教職員の取り組みに対する高い評価が示された一方、研究内容の深化、発表の在り方、次期 SSH 計画の具体化について多くの建設的な助言がなされた。特に、「研究の楽しさ」と「探究力の育成」を中心に据えた SSH 事業のさらなる発展への期待が寄せられた。